図工のみかたのみかた

MIKATA NO MIKATA

図工の先生のそのまわり

今号の図工のみかた、大泉先生をかたちづくるもの。大泉先生がより広く大きな枠で子どもたちを見つめるようになったきっかけ、本・言葉などを教えてもらいました。

絵心のファシリテーターは両親

父親のスケッチに触発され、幼い頃、見よう見まねで絵をかき始める。たくさんかけるように、母親は裏の白い広告を手帳大に切って山積みにしておいてくれた。

父親が手帳にかいていたスケッチ

「絵っていうのは どこでもかけるんだぞ」

大学進学を考えているとき、当初美大を目指していたが、父親が亡くなり、浪人できない状況に。そのときの美術の先生のシンプルな言葉に妙に納得し、教育学部への進学を決める。

「先生、屋上に来い！」

小学校での教育実習中、6年生のわんぱく3人組に呼び出され、気持ちを真正面から受け止める。その直後、指導教官から「ありがとう。子どもたちの面倒見てくれて」と言われ、「知ってたなら、止めてよ」と思うも、教育の奥深さを実感。教師になることを決意。

「授業の準備は万全です！ 理論武装してきましたから」

教育実習生と授業の打ち合わせをしていたとき、学生の理屈的過ぎる姿勢に違和感を覚える。先生を目指す人の図工観や子ども観に問題意識を持ち、教員養成の世界に目を向ける。

「娘はもう学校に行くことは ありません」

教師1年目で担任したクラスの子の母親からかかってきた電話。家の事情で学校を去るという。その子が抱えていた事情をまったく知らなかったことに愕然とし、子どもは学校の中だけでなく、様々な関係性の中で生きているのだと改めて理解する。

『ぼくを探しに』

自分に合う形を探しに行くという絵本。いろいろな人や事象との出合いを通して自分が形づくられていくということを教えてくれた。自分の子どもにも見せてみたが、食いつきはいまいちだった……。

シェル・シルヴァスタイン（著）　倉橋由美子（訳）
講談社刊

『教育を支えるもの』

いわゆる教育哲学書。「教育的雰囲気」という概念で、それまで教師から子どもへの一方通行だった教育的関係を相互関係に捉え直したことに感銘を受ける。学生にも、この本にある「信用と信頼」を取り上げながら、子どもに向かう姿勢について説く。大泉先生のバイブル。

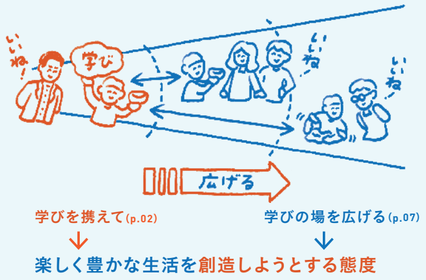
O.F.ボルノウ（著）　森昭、岡田渥美（訳）　黎明書房刊

人生のモットー：自分の乗りたいクルマに乗る

少年時代、造形としてのスーパーカーのかっこよさに魅了される。その頃集めたスーパーカー消しゴムを後生大事にとっている。大人になった今、常にクルマのローンに追われるが、次に何に乗るかを想像し、幸せな気持ちになる。

学習指導要領　資質・能力の三つの柱

学びに向かう力、人間性等ってなんだ？②



今号は、「どのように社会や世界と関わり、よりよい人生を送るか」に関わる、学びに向かう力についてのお話でした。子どもたちは、学校、家庭、社会と関わりながら生活する存在であり、その学びは授業の中だけにとどまりません。学んだことを携え、学びの場を生活へ広げています。そのような子どもたちの学びに対して、大人が寄り添い、肯定的に捉えることで、学びに向かう力を育んでいくことができるのではないでしょうか。

子どもが本来もつ学びへの探究心に寄り添うこと、それが「学びに向かう力」を育むことなのです。

造形的な見方・考え方　感性や想像力を働かせ、対象や事象を、形や色などの造形的な視点で捉え、自分のイメージをもちながら意味や価値をつくりだすこと

図画工作の目標（3）　つくりだす喜びを味わうとともに、感性を育み、楽しく豊かな生活を創造しようとする態度を養い、豊かな情操を培う。

社会に開かれた教育課程　子供たちに求められる資質・能力とは何かを社会と共有し、連携する「社会に開かれた教育課程」

（小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説図画工作編より）

表紙　『だんだん だんボール』(2年生)

段ボール箱を使って、思い付いたことを試す造形遊びの題材。普段何気なく見ている段ボール箱に体全体でかかわり、イメージを広げ、自分にとっての意味を生み出している瞬間。きっとここから、「普段何気なく見ている」世界に、楽しさや豊かさを見いだす生活が広がっていく。　平成27年(2015年)度版 小学校図画工作科教科書1・2下 p.36-37

クリエイティブディレクター：池田晶紀（ゆかい）
アートディレクター：畑ユリエ
表紙写真：川瀬一絵（ゆかい）
フォトグラファー：池田晶紀、川瀬一絵（ゆかい）
イラストレーション：やまねりょうこ（ゆかい）

図工のみかた 05号

日文教育資料［図画工作］
平成30年（2018年）5月31日発行
編集・発行人　佐々木秀樹
発行所　日本文教出版株式会社
〒558-0041　大阪市住吉区南住吉4-7-5
TEL：06-6692-1261

本書の無断転載・複製を禁じます。

CD33392

日本文教出版 株式会社
http://www.nichibun-g.co.jp/

大阪本社　〒558-0041　大阪市住吉区南住吉4-7-5　TEL:06-6692-1261　FAX:06-6606-5171
東京本社　〒165-0026　東京都中野区新井1-2-16　TEL:03-3389-4611　FAX:03-3389-4618
九州支社　〒810-0022　福岡市中央区薬院3-11-14　TEL:092-531-7696　FAX:092-521-3938
東海支社　〒461-0004　名古屋市東区葵1-13-18-7F・B　TEL:052-979-7260　FAX:052-979-7261
北海道出張所　〒001-0909　札幌市北区新琴似9-12-1-1　TEL:011-764-1201　FAX:011-764-0690

日文教育資料［図画工作］

子どもの姿から図工を考える
号 05
2018.05

図工のみかた

INTERVIEW
大泉義一
（愛媛国立大学准教授）
教育指導要領
「学びに向かう力ってなんだ？②」

本資料は、一般社団法人教科書協会「教科書発行者行動規範」に則り、配付を許可されているものです。

日文の実践事例、教科情報
詳しくはWebへ！　日文　検索

未来をになう子どもたちへ
日本文教出版

図工って、なんだ？

図工の時間、
学校の外で見つけた形や色を、
教えてくれる子どもがいます。
家族に作品を見せたいと、
意気込む子どもがいます。

そのとき子どもたちは、
図工の学びと生活を
どう結び付けているのでしょうか。

学習指導要領のキーワードと、
図工の見方について、図工の味方、
大泉義一先生に聞きました。

語り手
大泉義一
（横浜国立大学准教授）

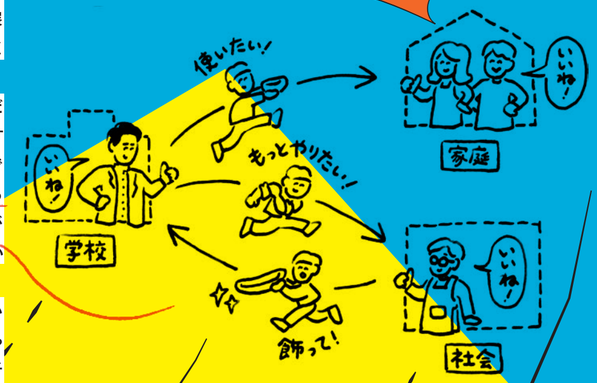
おおいずみ・よしいち
1968年、東京都生まれ。公立中学校、東京学芸大学附属竹早小学校、北海道教育大学助教授を経て、現在横浜国立大学教育学部准教授。学習指導要領等の改善に係る検討に必要な専門的作業等協力者（平成29年告示小学校図画工作）。子どものためのデザイン教育実践としての巡回型造形ワークショップ・プログラム『アートツール・キャラバン』を展開するなど、日本文教出版小学校図画工作教科書の著者の一人として美術教育の発展に努める。

大人が境界を点線にする、子どもの学びの場が広がる

4年生の図工で、使えるものをつくることをめあてにして、焼き物の授業をしました。子どもたちはつくった器を実際に使うのがうれしくて、家でどういうふうに使ったか、保護者の方がどう思っていたか、いろいろと話してくれました。後日、焼き物をすごく気に入ったある男の子が「ぼく、町の陶芸教室に通い始めました」って言ってきたんです。信楽焼の長いすし皿を持ってきて「校内展で展示したいから、スペースをつくってよ」って。こんなこともあるのかと喜んで展示しました。学校で学んで外に出ていって、外での経験をまた学校に持ってくる、子どもが勝手に越境している感じが面白くて。

でもよく考えると、私たち大人が勝手に学校と外との間に線を引いているだけなのかもしれない。子どもは当たり前に、学校で学んだことを外で生かすし、外での経験を学校に持ち込んできます。もちろん学校と家庭や地域とでは、子どもと向き合う大人の役割は違うけど、大人がその領域を線で分断するのではなくて、点線にするみたいに、学ぼうとする子どもを受け入れる姿勢が大切だと思うんです。「社会に開かれた教育課程」で言われているのも、そういうことです。

実際、子どもが学びを広げていくとき、そばにはそれを受け入れる大人がいるわけです。先ほどの焼き物で、子どもが水漏れする器を持って帰ったおうちでは、盛りつけるものを唐揚げにしてくれたそうです。陶芸教室に行った子だって、小学校4年生が教室に突然やってきても、見くびらずに本格的なすし皿をつくらせてくれる大人がいたんです。だから子どもは勇気をもって「これも飾ってください」って学校に持ってきたんです。大人が寄り添い認めてあげることで、学びを生かす場、学びの場はもっと広がっていく。学びに向かう力は、子どもと大人の協働作業で成り立っているんです。



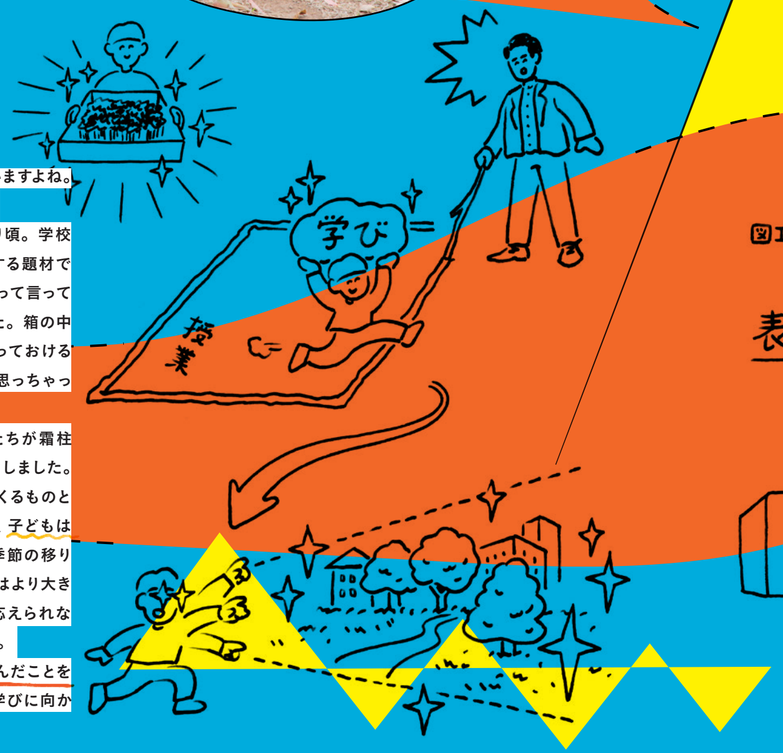
いつでも学びを携えて

子どもって、「光の影がきれい」とか「この石の形がすき」とかを見つけていますよね。図工の授業の時間じゃなくても、いい形や、きれいなものを発見している。

低学年で「たからばこ」という鑑賞の授業をしました。季節は秋の終わり頃。学校の中を探検して、自分がいいなと思う形や色のものを集めてみんなに紹介する題材です。すると、あるグループが探検から戻ってきて、「先生、これすごいよ！」って言って駆け寄ってきた。箱には黒々とした土が入っていて、そこに霜柱がありました。箱の中は泥だらけ。「どうやってとっておけますか」と尋ねる子どもに、ぼくは「とっておけるかな……」って言葉を濁した。内心、溶けちゃうし、捨ててきなさいよって思っちゃったんです。

その後、学校用務員の方と話す機会があって、「先生、きょう、子どもたちが霜柱とってましたよ。あれね、たぶん今年初の霜柱ですよ」って言われて、ハッとしました。ぼくは、図工の授業で美しいものを探すと言ったら、落ち葉や小石を持ってくるものと決めつけていたんです。想定した狭い枠の中で子どもを見ていた。だけど、子どもは授業という枠の中だけじゃなくて、学校の中で生活し学んでいる。だから季節の移り変わりを敏感に感じ取って、霜柱の美しさを見つけだしてきた。子どもたちはより大きな意味で「たからばこ」という題材を捉えていたのに、なんでその気持ちに応えられなかったんだろう、なんて狭い了見だったんだろうってものすごく反省しました。

子どもは、学校や生活、社会の中で「たからもの」を見つけています。学んだことを携えて学校を飛び出し、日常に潤いや楽しさを創造している。いつだって学びに向かう力を発揮しようとしているんです。



自分をひらく、子どもの可能性をひらく

図工って、その子がその子らしくいられる時間です。素材に自分らしさを残す手応えを感じながら、自分にとっての意味や価値をつくりだす時間。だから、先生にとっても、「その子」が見えてくる時間になる。

ある研究会で、特別支援学級の子どもたちが段ボールを使って「秘密基地」をつくるという実践をしていました。その中で「カラオケ」をつくった子がいたんです。「秘密基地」で「カラオケ」っていうのも面白いんですが、その子はマイクもつくって歌い出して、お客さんを呼び入れたりして。ちょうどそこに、その子に音楽を教えている先生がいて、「○○さん、こんなに歌えるの！　私の授業のときは歌わないのに……」と言っていました。そして、その後に続けて「わたしもがんばらなきゃ」ってつぶやいたんです。

この先生に対してすごいなって、ぼくは本当に思ったんです。とかく、こういうときは「音楽じゃなくて図工の時間に歌ってもねぇ」って皮肉を言って終わってしまうことも多いけど、この先生は「この子は歌える！」って気づいて、「わたしの授業に問題があるのかも。もっと何ができるんじゃないか」って、ちゃんと自分と向き合った。題材とか教科にとらわれず、子どもがやっていることから、自分の子ども観・教育観を問い直したんです。こんな先生がそばにいるなら、今後その子は表現の場を広げていけるんじゃないかな。

図工には、子どもを再発見するという「見とり」のチャンスがあちこちにあります。先生が自分をひらいて再発見を受け入れて、その子の学びに寄り添うことが、その子の可能性をひらくことになるはずです。「この子はこうだ」っていう自分の子ども観・教育観が覆って、「そうじゃなかった！」と子どもを再発見することを、ぜひ楽しんでほしいと思っています。

『じっと見つめてみると』

生活の中で、心に残った景色や出来事、その時感じた気持ちを、絵に表す。
授業の前に、じっと見つめた風景が、たからものになっていく。
授業の後で、新しく出合った風景に、たからものを見いだしていく。
創造は、いつも授業の外へ広がっている。

平成27年(2015年)度版 小学校図画工作科教科書5・6上 p.22-23

図工の見方を携えて。

雨上がりの水たまり。
波紋、青空、雲。
子どもたちは、生活の中で
自分にとっての
「たからもの」を
見いだしています。

「できた！」の向こう側へ、
子どもたちは学びを携え
飛び出しています。